

---

# 愛ゆえに～

一理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛ゆえに〜

### 【Nコード】

N0969H

### 【作者名】

一理

### 【あらすじ】

姉：夕姫妹：夜雨二卵性の双子で姉はいつも妹に弄ばれる。妹の趣味：姉いじめ。好きな食べ物：姉(?)好きなタイプ：自分。サデイストの妹が贈る、姉と妹の美しい姉妹愛ストーリー

## 第一話（前書き）

ちよっと、ヤバメですが、ちゃんと健全です。



「もー朝から耳にアムってやりやがってええ……。」  
「……夕姫の言い方って幼稚だよね」  
「なんで!!！」

えー

「だって『耳を味見されました』とか、『食べられちゃいました』  
とかなら分かるけど」

「わかんねーから!!しかもなんで嬉しそうなそれ!？」

「夕姫のは『アムってされた』って表現の仕方が子供だなあ、頭撫  
でようか?」

「いらねーよ!!！」

朝から叫びまわって疲れたのか、ゼーゼーと顔を真っ赤にしてダウ  
ンしている。

……可愛い。姉が妹だったらよかったのに……いや自分が男だ  
ったら……。

ない物ねだりをしてもしようがない。

「とりあえず学校いこうか?」

「そ、そうだな」

……。

「うおおおおおおお!!！」

「ほらほらネーさんもっと速くはしってえ〜」

坂道を姉が全力疾走するさまを自分は悠々と自転車に乗って眺める。

「遅刻しちゃうぞ」

「なんであたしのチャリパンクしてんだヨオおお!!！」

私がパンクさせたからです。

「しかも、ちゃんと目覚ましかけたのに何で止まってんだヨオおお  
!!!」

私が止めたからです。

うおおお!!と風よりも速い姉を眺めながら、後ろで微笑む。  
今日も平和だ。

「夜雨〜いい加減姉いじめやめたら? かわいそーじゃん。こんなに  
可愛いのに!」

なあでなあで・・・ねちつく姉の頭を撫でるコイツは姉と同じク  
ラスの・・・。

「ええと?・・・申し訳ございませんが、なんと云うお名前でした  
か?」

「丁寧に聞いているけど内容ひどお!!?? 毎朝あつてるのに今更?  
!」

「えーと? 同じ学校のかたでしょうか?」

「同じ学校じゃなかったら何でここにいるのアタシ!??」

「あ、そうですね? 姉とはどういった仲で?」

「ふざけるのも大概にしるおお!!」

突っ込まれたところで扉があいた。

「和美なにしてんだ? 赤川妹に弄られてるなんて珍しいな、いつつ  
も赤川姉なのに」

「弘瀬! アタシだって好きで弄られてんじゃないわよ!」

あ、思い出した。南 和美 と 足立 弘瀬 だ。  
幼馴染の腐れ縁でいつつも同じクラスになる、ある意味のろわれ・  
・失礼。麗しきかなの二人である。

「どうでもいいから忘れてたな」

「なにが？」

しまった、つい本音が。

まあ、聞かれたのが姉ゆきなら問題ない。  
すぐ忘れるから。

「あ、先生きた」

うちのクラスの先生は生徒指導・進路指導担当の超・真面目人間の  
鬼北山将おにきたやま31歳独身」で、とっても厳しい。しかも化学担当。

「今日締め切りの提出物を出しなさい！」

「あ、やっべえ忘れた」

「私もー」

「忘れたものは課題プリントをやるように！」

「はああうー!？」

姉が奇妙な声をあげた。

「やばいよヤバイよ！忘れちまったよ！！やばいぜ」

(どれだけヤバイのか分からないけどあせってるんだね姉さん)

あせあせあわてた後先生のところまでトコトコ歩いていった。

「あのお・・・わつせましたあ」

「だったら課題をYa」だいつじょおおおおぶ！！」「」

鬼北山の言葉をさえぎったのは誰だか確認するまでもない。

体育教師「原 巧<sup>たくみ</sup>」だろう・・・。ココまで来ると病院いきをお勧めしたくなるほど頭大丈夫かって言いたくなる。

「センサー頭大丈夫？いつものことだけど」

和美がズバツと切り捨てた。

「そのプリントせんせえええがもってきましたからあ」

「でも、判子要りますよ原先生」

怒りマークをつけながら鬼北山はいった。

「だいじょおおおぶ！！ちゃんとサインも判子もついています。机の上置き忘れられてました！」

「何人の家勝手に入ってたんだあ？！」

「先生、電話していいですか？保健所に(微笑)」

「なんで保険所！？警察じゃなくて？！」

「自分で行くべき場所分かってんじゃない！いけよそこに！！！」

どんどんカオスな世界に嵌って行く。まあ、今に始まったことじゃないけど・・・。

しかしあれだ、玩具を取られるのは面白くない。

だから……。

「ふうー」

ギリラン！

「」「どう!?!?」「」「」

その教室一面に殺気を送る。私を無視するなんて、なんていい度胸<sup>シカト</sup>。

「……(にこ)」

「よ、夜雨どうかしたのか?」

怯えながら夕姫は尋ねる。私は素知らぬ顔で微笑む。

「姉さん、悪い事したらどうなるかな?」

「え?さ、さあ?」

「知らないなんて、駄目だなあ……悪には鉄槌を……」

トンカチを取り出す。

「頭が良いかな?それとも顔?」

「そ、それで……どうするき?」

決まっている。

「原先生に裁きを」

「おさえてえええ?!」

姉に飛びつかれた。ぎゅ〜と本気で取り押さえようとしている様は、滑稽だ。

少し機嫌が戻ったので、姉の頭をなでなでする。

「カワイーなあ、冗談だよ、ああ勿論そう」

「そうなの？」

「本当」

半分本気だけどね（笑）

「そうだ、夕姫」

「なに？夜雨」

ぽっ！と頬をワザとらしく赤く染める。

「ア、朝のはちょっと刺激強かったよ・・・？」

その場が静まり返った。

姉の肩が明らかに震える、勿論動揺したとかではない。怒りで、だろっ。

「なんのことだあああああああ！！！」

今日も今日とて元気よく姉の雄叫びが木霊する。

ああ、今日も幸せだなあ・・・。

## 第一話（後書き）

コメントがあったら書いてください、ね。

## 第二話（前書き）

よくあるご家庭でのある出来事・・・。誰しも一度は経験あるんじゃないでしょうか？

## 第二話

「……。夕姫」

妹ははそつとあたしの名前を呼ぶ。

なぜそんな恐る恐る聞くのだろう？

「なに？」

手まで震えている。……むしろどうした？

「な、なぜエプロンを着ていらっしやるんでしょうか？」

しかも敬語にまでなりやがった。

あたしが台所でエプロン着て流しの前にたったらそんなに可笑しいのか!？

「みてわかんねえのかよ!皿洗するんだ!」

手にはスポンジとお皿。

「夕姫が……?」

「だから!そこで声を震わせる意味がわかんないから!」

「なぜ？」

「只単純に母さんに頼まれたからだよ!」

確かに、そりゃあ……めったにっていうか、あんまりキッチンにたたないけどさ。そこまで驚くようなことでもないだろうに。

「気をつける」

「何に!？」

イキナリの声のトーンの低い忠告をもらい、あせる。

「知らないの? ああ、姉さんはめったに立たないものね。知りえるはずがない」

「なんだそのいいかた、何気今見下したろ」

「危険に降り立つ姉さんに私が助言しよう」

「この範囲で危険って何あるんだ?!」

「グットラック」

というと、リビングに歩いて行って椅子に座ってテレビを見始めた。

「って! おおおい! 結局なんなんだよ! 無いだけじゃないのか?」

「・・・ふ、知らぬが仏よ」

「く、・・・むかつく」

とにかく母が帰ってくるまで皿洗いを済まそうと手を動かす。

「しゃこ しゃこ しゃこ」

「ぶ、おそ」

お皿を磨く音を聞いた夜雨が鼻で笑った。リアルでむかつく。

「じゃあ速くやってやらあああ!」

「つるっ・・・がしゃん」

「・・・あ」

「あらら、記念すべき一皿ご臨終です。」

「拝むなあ！！記念すべきとかいうつな！！！」

別に料理ができないわけではないわけじゃない。家庭科の授業でも普通にできるどころか「夕姫さん、見た目にそぐわずお上手ね」って先生にも褒められるし・・・って褒められてねえええ？！

「夕姫・・・思い出し笑いってのは聞いたことあるけど、思い出し怒りってのは聞かないよ？しかもソレ中学の頃だし、今は高校生だよ」

「何で人の心の中について分かるんだあ！？？」

「愛ゆえに・・・。」

「頬赤らめるなああ！！！」

どうしてアタシの妹はこうもレズっ気があるんだ・・・いや、レズじゃないなSだ。しかも超ど級のどS。とりぷるS

「ネエさん、余所見は危ないぞ」

「危ないのはお前だよ！！何包丁持ってんだあああ！！！」

急いで包丁を奪って包丁棚にしまっ。

「冗談だよ、この皿については私が処分しよう」

とっていつの間にか集めた割れた皿をビニール袋にいれてあるいていった。

それをみて、むう・・・っとする。

（なんだかんだで夜雨のやつめんどくさいこととかやってくれんだよな）



「あああああ！！本当だよかった傷ついてない！？」

「ゴシゴシ力強くあらっちゃ駄目って言おうとしたのに・・・夕姫  
払いのけるんだもんな」

傷ついたわく、とたいして興味なさげにお皿を眺めている。

「もう、夕姫は座ってまってなさい。私の華麗な皿洗い裁きを見せ  
てやるう」

とか何とか言われて、座らされてしまった。  
待つこと10分

「はい、完了」

綺麗だし。速い。完璧だ。・・・別に皿洗いに力入れなくてもいい  
気がする。

「ち・ち・ち！料理は皿から」

「だから、何で心読めるんだよ」

はあくど、溜息つく

「ハイ、姉さん お疲れ」

美味しそうなパフェを持ってきた。

彩りも綺麗で果物もクリームも乗っている。おまけのチョコも・・・

「美味しそう」

「疲れた後には甘いものってね？」

「でも・・・」

「母さん帰ってくるの、まだまだそうだし」

「そうじゃなくて」

用意されたのは一つだけ。つまり食べれるのは一人。

「夕姫・・・」

夜雨はくすつと笑った。

「私は私の作ったものを美味しそうに食べてる夕姫を見るのが、大好きなんだよ？」

「そ、そう」

あまりにも魅惑な微笑を浮かべるものだから、つい頬を赤らめてしまった。

あたしは決してそっち系じゃないのに。

「じゃ、じゃあいただきます。」

「召し上がれ」

あむ・・・一口食べる。

うん、美味しい。お店と同じ味だ・・・。

つい頬が緩む。

どんどん食べ進んでお皿の中身を空っぽにした。

「ごちそうさまー！」

「姉さんが美味しそうに食べてくれて嬉しいな」

「別に、珍しいことじゃないでしょ!？」

照れ隠しにそういうと、悪魔じまは笑った。

「そう?よかった。消費期限切れの材料を集めて作ったんだ&am  
p:#9835:」

「……………はい?」

「いやあ、皿洗いついでに冷蔵庫の中も掃除してみたらさあ?意外と多くてね?材料集めたらパフェできそうだな。っておもってえへ?つとわらう。

「姉さんならきつと食べきつてくれると思ったよ」

意識が遠のいていくような気がした。

「人のことなんだと思ってんだああ!!」

病院いったほうがいいのだろうか?気持ち悪くなってきたぞ……?!

「ううう」

フラフラとつかべにもたれかかり、受話器を手に取るつとずる。その手を悪魔が制す。

「ネエさん、しんどい?」

よくもまあ、ぬけぬけとおおお(怒

「死んだら呪ってやるうう」

それまでほくそ微笑んでこらえきれぬ顔をしていた夜雨が、とうとうふきだした。

「ぷ、あははは！」

地面まで叩き始めた。こ、こいつ姉が苦しんでいるさまを見て大喜びじゃがってえ！！それでもアタシの妹か？！いや、ソレより本当に人間かああああ！？

「はあ、はあ・・・」

笑いすぎて軽い酸欠も起こしている。そこまで？

「嘘だよ？」

涙目でそういった。

「・・・ん？」

言った意味がよくわからなかった。

「だから、消費期限切れって言うの嘘」

つまり、死にそうになるわけがないのだ・・・。  
もしかして、アタシ・・・馬鹿？

「うわあああああああ！？」

そう考えるとじぶんめっちゃ恥ずかしい・・・っていうか痛い子じやん?!

は、図られたあああああああ!.....!

「あは!あははは?!ない、ナイス!ナイス演技!あはははは!...!」

恥ずかしさから顔も耳も真っ赤に染め上げる。

「オマエエ!!!いい加減にしろおおおおおおお!!!」

今日も今日とてあたしの悲鳴が響き渡るのであった。

お願いだから本気止めてください。

## 第二話（後書き）

姉視点です。ある意味二人は相思相愛&amp;#9835;コメントあったら書いてくださいぬえ！

## 第三話（前書き）

多分面白くなってきました！





何かした覚えはない。昨日のことを振り返るなら……。

「夜雨」

「なに？夕姫」

「宿題教えて」

「いいよ」

珍しくあっさり承諾。

「でさあー、ここなんだけど？」

「ああ、ここなら知ってるけど……こうやるんだよ」

簡単なミスでつまっていたただけだったから、そこだけ指摘されたら後はもう分かった。

「ありがとう！珍しく優しいな！」

「いつも優しいだろ？」

「……。ここか？」

別に些細なことだし、その後すぐ仕返しされた気がする。100倍返しの言葉の暴力……。とりあえず思い当たったことを謝ってみることにした。

「夜雨」

「ん？」

「昨日はゴメンね！『珍しく優しい』って言って！普段から何気優しいもんな！」

「……。」

変な顔された。

違うのか？じゃあ、あれか？

昨日のお昼の購買のプリンの最後あたしが先に買ったからか？あれ？でも奪われた気がする……。

「えっと？ぷりん……？」

「は？」

馬鹿じゃねーのって言う目つきされた。

「じゃなくて……。」

もしかして、昨日の夜の夜雨の部屋に入って本黙って借りた拳句本を棚から全部落つことしちゃったことか？！でも、綺麗に直したのに……いや！こいつなら分かったのかも……！！

「ごめん！昨日勝手に本借りた拳句棚から全部落しちゃって……！」

「はあ……。」

溜息つかれた!？

「……馬鹿？」

物凄く馬鹿にされました。

「あっち行って」

拒絶されましたあああ?!

「じいじい！ごめんよお〜本当にゴメンよお〜」

拝むように謝るが冷たい一瞥でNO反応。むしろ辛い。

「ちよいと夜雨〜なんか言ったらいいじゃん」

「死ね」

「……………いや、あたしにじゃなくて……………ってか、ひど」

「なんかあったのか？赤川妹？」

「……………」

「……存在無視！？」「」

一体何が彼女に！？

「夜雨ー！何に怒っているんだようー！」

「怒ってないけど？」

「嘘やん！？怒ってるじゃあアアン！いつもとちがうやああん」

つい悲しくて（むしろ恐ろしくて）おお泣きしてしまう。

ソレを見た夜雨は、無表情で黙り込んだ。

（（（コワッっ！？）））

「今日のHRは原センサーですヨオ〜！！夕姫さあああん」

「ぎゃあああ！〜うぜえ」

「赤川姉、今日も大変だな和美はああならなくてよかったな？」

「なるわけないでしょうが」

ばん！……！

威圧的に机が叩かれた。

「……………」

「夜、夜雨さん？」

「……………（にこり）」

薄暗い笑み。暗殺者アサシンのような獯猛な瞳を隠すライオンのように……。

「先生？いい加減私の姉にセクハラ行為するの……やめていただ  
けませんか？」

「ソレはできません！愛のためにー」

「アンタに愛ねえよ！！」

「私のほうが先生よりずうーと愛してます！！」

「さっきまで無視してたのにか！？」

いつもの夜雨に戻って少しほっとする。

「先生より私のほうが姉に対する気持ちの思い入れが違うのですよ  
」！」

「いいええ！私のほうがずっとずっと強いのですよお！！」

「なにたわけたことおっしやってるんです？私なんて前世でも姉と  
は……、仲良しだったんですからね！」

「何で今ためたの！？」

「私なんて前世では運命の人だったと懇願してます！！」

「いみわかんねえから！？」

「先生あんまり戯けた事ぬかすと……」

ソレまでの顔が変わる。

いつもより低めのトーンで何か囁いた。

・・・ゾク!!

強烈な殺気が教室を包む。一般市民がココまでするなんて予想外だ。それはそれで複雑なものがある姉であった。

・・・がらら

「ありや？なんか寒いぞ？冷房効いてる？」

「颯太<sup>そつた</sup>くん!!」

二人の目が光る。颯太のほうに悪魔が移った。

「よーっす！南に足立！そんでもって赤川もな」

「おおお、おはよう！」

そんな朝のやり取りだけで顔が赤くなっていくのが分かる。やだなあゝ恥ずかしいな！

言わずとも夕姫は 宮川 颯太 の初恋の人・・・いまだ告白できず

「遅刻ですか、いいご身分ですね。とっとと出て行け」

「あ、ちゃんと遅刻届の紙貰ってるぜ？ほれ」

「そうですか、帰れ」

「はい、席に帰りまーす。」

すたすた、すとな。

窓際の自分の席に座って鞆を足の横に置く。

「……？どーした先生？HR始めないのか？」

ちなみにカレは天然だ、ド級の……。

「なあ足立、昨日のノートうつさして」

「や、いいけど……お前って凄いやな？」

「それほどでも……ってなにが？」

「……いや別に」

キンコーンカーン

特に何もしていないHRが終わった。

「あああ、あの！！颯太くん！」

「なあ、夜雨さーん」

「あう」

気持ち空回り。

まるでなついた子犬のように夜雨のほうにかけていく。

(ああうー可愛いな颯太君！ってかなんで夜雨のほうにいい)

うしろで雑念送るが届きもせず、本を読んで一瞥もしない夜雨に明るく話しかける。

「昨日さあー俺にあつたる？」

「うそお！！いつ？！」

「昨日、俺学校サボってたんだけど」

「サボンなよ……(汗)」

・・・昨日のこと。

土手のほうを歩いていたら、夜雨さんを見つけた。

何か眺めているから何事かと思ったら、昨日の晩降った雨で増流した川に、箱の中に入れられた子猫を眺めたいんだ。

「・・・」

「助けないのかあ？」

にこつと笑いかけるが、笑い返してもらえなかった。この人はいつも笑わないなあ。俺限定で なんかしたかなー？

「・・・見てるの助かるか、助からないか」

「・・・助けよーとか、思わないの？」

「思わない。」

やけにきつぱりとした言葉だった。

「助かったところで生きていけるものか。たった一匹・・・苦痛と孤独の中に生きるぐらいなら、死んだほうがどんなにまだ楽か」

「まるで体験したみたいない言い方だね」

「・・・そんなわけない」

彼女は興味なさげに子猫から目を放した。か弱い白い子猫は必死に助けを呼んでいる。

「・・・ばっしや！」

「？」

彼女は振り返って驚いた顔をして見せた。  
川に入って可愛い子猫を抱いた俺を、心底呆れたように見た。

「誰かに助けてもらったら、死んだほうが楽って思わなくなるよね」

「そうだね。だから？」

「え？いや、だからっていわれても」

答えなかった俺に愛想付かしたように去って言った。かすかに口元が笑っていたような気がした。いつか、ハッキリした笑顔が見れるようになったらなー・・・

「なんて？」

にっこりと颯太は笑った。

「夜雨ー！お前は鬼かあああ」

子猫を見殺しにしようとしやがってえええ！動物愛護班に謝れ！！

「違う！語弊があるぞ！！増流っていつてもかなり酷かったんだぞ？！入ったら死ぬって！！」

「じゃああ！颯太くんだつて死ぬでしょう！！」

「だから驚いたんだよ！！」

冷酷極悪非道みたいじゃないか私が！と必死に出張する。

「かつこよかったなあ、去り際に口から出る一つ一つの言葉」

うんうん、と颯太は頷いた。

「俺、夜雨さんのこと 好きだな！」

「うそおおおおおおお！！！」

「嫌です、丁重にお断りします。」

「はやあああああああ！！！」

シヨックを隠しきれず、ガクツと首が力なくうな垂れる。

「私はネエさん以外に興味ないの！」

「誤解される言い方するなああああ！！！」

「ライバルだね！赤川！」

「いやあああああああ！！！」

今日も今日とて

カワイそうな夕姫の悲鳴がエコーするのであった……。

## 第三話（後書き）

三角関係完成！

#### 第四話（前書き）

朝の姉起こしはもはや行事です。神聖なる物だと私は信じている）  
？）

## 第四話

今日も今日とて一日がはじまる。

・さて、愛しい可愛い私のおも…ちゃ…じゃなくておねーさまを起こしますか…。

地獄を知らぬ（普通は知らないだろう）顔で幸せそうに眠る姉の上に飛び乗る。

「ぐおお！？よ、夜雨〜！死ぬわ！」

「ごめんね姉さん。だって姉さんが余りにも幸せそうに寝てたもんだから…」

「私は幸せに寝る権利も無いのか！？」

そもそも権利云々の話だとおもつぞ（笑）

「毎回毎回普通に起こせないのか全く」

「別に、夕姫を責める訳じゃないけど…」

「ん？」

「いい加減、私に起こさねないようにはしなさいよ」

夕姫は沈黙した。

「そだね」

さすが姉

素直に謝るなんて素晴らしい志じゃないか…

私が目覚ましとめているというのに…

…

学校にて

「和美」

「何？苛めて遊んで欲しい？」

「んなわけねえよ！」

可愛らしい容姿に似合わない口調…黙っていればモテるはずなのに

「次の時間の宿題みして」

「い〜けど、1時間目先生来ないよ」

「やったあ ビバ フリーダム」

「しかしプリント置いていってるけどね」

「くそ〜、松男のくせに」

訳の解らない文句を言いつつ、席に座る。他の見張りの先生がくる気配もない。

「ねーさん」

「うう！…、夜雨？な、なにさ」

「…何をそう身構えるの？」

「最近見つけた、あんたがあたしのこと『姉さん』っていうときってからかってる時だもん」

夜雨が黙る。凶星だったらしい。珍しく当てたが…だからといって夕姫に夜雨をとめる術はない。

「あゝそば」  
「うわっ」

拒絶したように鳥肌たつのを無言でみつめる。

「なんか恐怖した」

「そこまで?!」

夜雨のかわりに和美が突っ込む

「分かった分かった、で?何すんの」

「言葉遊び」

ひゅ、風が吹く。

「で…:なんの話してたの?」

相変わらず気にしないで話を続ける。

「言葉遊びよ、ダサいでー」

しょう?っていうまえに颯太は楽しそうに笑った

「それはいいね!楽しそう!:俺も入れて」

露骨に嫌そうな顔をした夜雨を無視して、拒絶していたはずの(こ)夕姫)がにっこりと笑って頷いた。

「夕姫:私は哀しいよ?」

と、いうことで遊ぶことになった。

「言葉遊び・・・簡単に説明すればなりきりだよ」

「はあ？」

「例えば姉さんがどっかの国の貧乏人の娘だとする。」

「うん」

「どう思うっ？」

「いきなり?!」

どっかの国の貧乏な娘・・・?だけ?考えるとしたら

「そうだね、王子様とかしんじるかな？」

「.....」

え、なんかちんもくされちったよ?

「姉さん。乙女」

「う、うううう!うるさい!!世間一般的な考えを述べただけだよ!」

真っ赤になって威勢を張ろうとする夕姫、それは可愛らしいからいいけど・・・そんな顔していると・・・くるよ?

ばん!!!

「萌!!!」

「変態教師死ね」

原先生が出てきた。そして勢いに任せて姉に抱きつこうとしたので、乗りを乗りで返してぶん殴った。あまりの自然体に皆気がつかないほどだった。

「さて、姉さん自分が『王子様』だとおもっていらん？そこら入んの貧乏娘相手にする？」

「・・・？綺麗だったらするんじゃないの？」

「顔で選ぶの？姉さん」

「あ、あたしじゃないよ！！『王子様』だよ！」

つまり

「自分顔いいと思ってるの？」

「ふつといてか！！??？」

だって、顔が言いの選ぶんでしょ？んでもって今は夕姫が『貧乏娘だったら』って話だったし・・・。何か間違えてるかな？

あ、根本的にか

(からかうの面白いなあ)

「夜雨さんは？貧乏人の娘だったら何する？」

「・・・」

シカト！？まさかのとみんな汗をかく

「俺だったらねー」

ホントめげない颯太くんは自分に置き換える、ココまで来ると哀れも哀れだ。

「娘になるのか？颯太」

足立君の言葉に颯太は『うん』と答えた。  
ヤッパリカレは神に値するだけの天然馬鹿だ……。

「うん、お姫様になりたいな」

「勝手になれば？」

とことん冷たい

「夜雨さんは？」

「私？」

「そうだ！そーゆう捻くれた考えばっか持つ夜雨は、どうするんだ」  
「私は……」

権力も富も持たない貧乏な娘……もし、実際そうであつたら、いかにすばらしいことだろう。

「権力や富があるからといって幸せではない、逆もしかり……」

あるからと言って不幸せではないしないからといっても不幸せではないだろう。

と、推定するならば恐らく私の判断はこうだな。

「どうもしないな」

「自分から話振つといて……なんじゃそりゃあああああ……！」

会話は大事なコミュニケーションだよ、夕姫

寂しい会話しないような孤独な人間なんてつまらないし、悲しいじゃないか？

だから、姉さん

会話しよう？

「夜雨さんって、不思議な感覚持ってるんだね？」

「。。。。。」

「「「無視!?!?!」」」

注意：皆さんは平等に言葉のキャッチボールを続けましょう。

#### 第四話（後書き）

なりきりって小さいころよくしました、たまーに考えてみれば面白  
いですよね。屁理屈こねれば特に・・・。

## 第五話（前書き）

姉を起こすいつものことがあったのにもかかわらず、なんだか嫌な予感がしてならない夜雨であった。

## 第五話

「姉さん、朝だよ」

ゆさゆさと肩を揺さぶるが起きる気配は一向にない。  
ならば仕方ないでしょう。

「姉さん、……。くす」

「どう!?!」

「ち」

身の危険を感じたのか、勢いよく身を起こした。

自分としては残念だ、何をしようとしたかはあえて言いませんけど  
?くす

しかし、今日は姉の叫びが聞こえなくて残念だ。

まあ、でも、そこは……。ねえ?学校で弄るから良しとしましょう  
かね。

しかしなんだろう、今日は嫌な予感がする……。

…

学校に着いた。何やらいつもより落ち着きがない。まあ夜雨にとっ  
てそんなことは関係無い。姉さえ弄ることが出できればそれでいいの  
だ。

歪んだ愛情だ

他の女のコたちも騒がしい、夕姫は…

「地に足着いてないみたいだね姉さん。いつもだけど！」

「なんで毒吐くかなあ!？」

「寂しかったから？」

えへ と姉にだけ見せる笑顔で笑った。

「…むうう」

なんか可愛らしい唸り声で睨んできた。何？反抗期？

「夜雨は…好きなひといないのか？」

ああ…前々回のをまだ引きずってたのか、この人は

「なんで？」

「べ、別に」

「姉さん。…私はね私が付き合う人には条件があるの」

「条件？」

んなもん、実際はない。しかしそこまで姉が心配するなら安心させてあげましょう。それに本気で颯太は興味ない。もちろん他のやつもだけど

「条件、全知全能で容姿もよく、普段は地味要素で隠していて、じつわあるすごい組織で働いていて、趣味が自作小説作りで天然が入っていて、スゴくモテているけど最終的に私を選んでくれる。そんな人希望」

「そんな神みたい人居ないから!!」

だからこそ、の条件なのだけどね。

「なんかさ、女子の間で占いがはやってるらしいんだ」

「へえーえ」

そんな不確率なもの、少なくとも夜雨は信じていない。姉は信じてこそはないのだろうが、楽しんではいるようだ。楽しそうに本を見る。

「アナタの周りに男に興味ないって言う人がいたら、その近いうちに運命の人に出会うでしょう・・・だって！」

「うん、そうだね。ご縁があればね」

占いじゃない気がしますよ、ソレ

「きっと運命の出会いあるよー！」

「姉さん、意外と好きなの？占いとか」

「うん、・・・いや！別に好きじゃないけどさあ！どうしてもって言われたから」

「だれに？」

「か、和美に」

苦しい言い訳に微笑みながら見つめる、うん。じわりじわり弄なぶって遊ぶのも悪くない。素直なのか素直じゃないのか、微妙なところが馬鹿で可愛い。

「席に座りなさい」

鬼北山がちゃらちゃら遊んでいる生徒を睨みつける。

全員が座ったのを確認して扉のほつに目を向けた。皆もつられて目を扉にうつす。

「はいつてきなさい。」

ガラ

扉が開く。わぁ と生徒は声を上げた。

「……。」

「転校生だ、この時期に？」

生徒が三人入ってくる。

長髪を首の後ろに束ねた落ち着いた物腰の少年に、活発そうな強気の顔に、ツインテールを耳より上にくくっていて女の子らしい少女。そして颯太が入ってきた。

「おい、止まれ」

二人について行ってさりげなく席に座りに行こうとした颯太を止める。

うまくいくとも思っていなかったのだから、あっさり止まった。ならやらなきゃいいのに……。

「遅刻届貰って来い」

「はい……。」

リターンしていった。彼の行動は誰にも理解できないものがある。

(夕姫……あれのどこがいいのか、私にはさっぱりだよ)

たまに趣味悪いよ、とも思う。

「自己紹介」

先生がそういうと少年が頭を下げた。

「初めまして、神無月 衛まもろです。」  
「あたしは加々見恵理瑠かがみえりる。よろしく」

堂々とした少女だな、と珍しく夜雨が反応する。

HRも終わって、恒例の転校生の質問タイムに入った。

「何でこの時期に転校？」

「さあ？親の都合じゃないの」

「衛君は？」

「右に同じ」

「二人って知り合いなんだ？」

「幼馴染よ、親が仲良くってネエ」

「迷惑な話だ」

「あん？」

転校生に取り巻く人々を見ながら、夕姫組みは遠くで見守っていた。さすがにあの輪に入ってまで転校生と会話しようとも思わない。

「あの恵理瑠ってこ、見たことある。柔道・合気道・空手で県大会優勝してた気がする」

「女子ソフト野球にも参加していたらしいぞ？」

足立と和美が凄いものを見るよな目で恵理瑠を観察する。なんかあ

の子尋常じゃないぐらい強そうだ。それに打って変わって男のほうは弱そうだ。

「趣味とかある？」

女子が衛の気を引こうと必死になっているが、本人はあくまで義務的な感じにこたえる。

「趣味、そうですね。自作の小説などを少々」

「えー？すごーい！今度見せてエ」

「申し訳ありませんが、あくまで趣味なので、とても人様に見せるようなものではありませんのでお断りさせていただきます。」

「いいジャン、気にしないからさあ」

とても会話を楽しむ、という気はないようだ。他の女子もよく根気よく話すものだ。

逆に女子たちに感服しそうになるね、ならないけど

「もしかしてさ、アレか？」

夕姫が嬉しそうに言い出して、少しぎくりとした。

「なにが？」

「条件だよ、夜雨の条件に入るじゃん、趣味とかもてるとことか。」

「残念ながら、彼は天然じゃなさそうだよ」

夕姫の中でアレとくっつけさせられるなんて嫌だ、たまったものじゃない。

「ちょっと、失礼します。」

衛が席を立つ。恵理瑠が話しかける。

「どこいくの？」

「・・・休憩」

ひとりになれる場所に行こうとしているのは、その表情からすぐに読み取れた。とてもげんなりしている。一人が好きなタイプなのだろう。それにこの空間は辛いのだろう、じゃっかん不機嫌にもなっているように見える。

「あ、まってよお」

女子の一人に急に服をつかまれバランスを崩した。

「アブナー・・・」

「え」

なぜ・・・コツチに向かってコケル？  
がっしゃーん！！

「きゃあ！大丈夫か夜雨！？」

返事をしようと口を動かしたが、何か柔らかくて重いものにふさがれていて声が出ない。

なぜだろう、全体的に思い。かなり嫌な予感がする。

「・・・じめん」

目の前で何かが動いて何かが言葉を発した。

重なっていた唇が離れる。

きゃーVV

女子の黄色い悲鳴が上がる。

キス・・・された。

「っ」

すっぱーん！！

いい音が響いた。衛は怒ることもせず、啞然とすることもなく冷静に夜雨を見て真面目に言った。

「ごめん、事故です」

無表情でそんなこと言われたら、ますます腹が立つ。もういっぱつ殴ろうかとも思ったが、夕姫の手前一発でスマしてやろう。だけど腹の虫は収まらない。

「大丈夫ですか？」

彼の手が伸びてくるのを思いっきり避けて自分の力で立った後、声高らかに叫んだ。

「下がれ、下郎！！！！」

その場に居た全員が口をぽっかりとあける。

「いつの人？」

「二度と！私に触るな！！」

「……」

それには彼もカチンと来たのか、眉毛を潜めた。

「何様か知らないが、こちらはちゃんと謝ったんだから。そこまで言う必要性はないでしょうに」

「無機質な感情のない謝り方で許せると思うなよ」

二人の間に火花が散る。

夕姫は困った顔をしてあうあうと唸っている。

「あー」

そこでマイペースな声が険悪なムードをぶち壊した。声の主は恵理瑠だった。

「もしかして、ファースト・キスだったとか？」

人懐っこい笑みでたずねると、沈黙した。あちゃーと恵理瑠は衛を見た。

衛は何も言わずに沈黙した。

「なんか言いなさいよ。衛、結構悲惨よ」

「……なんかって、……責任は取りません」

「さいっつていだな！！」

夕姫がさげんだ、まあ、そう思うわな。

「……ふ」



## 第五話（後書き）

上には上が居た。っというところで。恵理瑠さんはいろんな意味で大物です。

## 第六話（前書き）

主人公は今回脇役に近いです。

## 第六話

これはもしかして、恋？

あなたを見るとときどきするの、うきうきするの、どこか・・・安心するの

こんな気持ちにさせてくれるあなたが大好きです。

あなたは私を知らなくても、私はアナタが大好きです。だから・・・付き合ってください。

・・・。

「うわああ！！衛にloverレター」

衛は恵理瑠に後ろから手紙を取られると大きな声で暴露されてしまった。

どうでもいいが何故そう大きな声で言う必要がある？

「あれ？誰からか書いてないじゃん」

「書き忘れたんじゃないのか。それより返せ」

「聞けばいいじゃん、おーい誰かラブレターかいたひとお」

「そんなんで名乗り出るわけないでしょうに」

がらら・・・夜雨と夕姫が入ってきた。なんか四人目があつた。

「・・・何か？」

不機嫌そうな顔で夜雨は訊ねた。恵理瑠はまったく気にせず手紙を

二人に見せた。衛は本を読んでいた手を止めて恵理瑠をにらみつけた。

「ひとの手紙を勝手に見せるな」

悪びれない顔でテヘ　と舌を出した。  
読み終わった二人は衛を見た。

「あんだ、もてんだ」

夕姫は率直な感想を言った。

「……。俺はなんていったらいいんだ？」

夜雨は興味ないのか席に戻っていったがその目の前にニヤニヤした恵理瑠が立った。

「あんだじゃないの？これ」

「何故私が」

「愛情の裏返しとか？」

何の話をしているのか分からないといった風に夜雨は机の中から教科書を取り出し、次の教科の準備を始めた。

「君、俺の幼馴染のクセになんか酷いな」

「何？あんだアタシのこと好きなわけ？」

一気に教室内が静かになった。

男子の中で何気人気のある恵理瑠と女子の中で一部人気のある衛が・

なんか告白まがいなことし始めたら、誰だっけ気になるから黙り込んで見守り体制に入るだろう。恵理瑠の声大きいしね

「好きだよ」

恥ずかしげもなく衛は言った。

「そう、アタシも好きよ」

恵理瑠もあっさり返した。

「戦友として」

二人の声がそろった。っていうか戦友って何!?

皆心の中で突っ込んだが二人の中でその会話は終わったのかまた別々好きなことし始めた。

「で、結局誰なのよ、この手紙の持ち主」

恵理瑠はこの手の話しがすきなのかそれとも騒ぎたいだけなのか探し出そうとしている。

「夜雨はラブレターとか書いたことある?」

「・・・」

恵理瑠のコメント無視してノートにうつっていた宿題を済ませている。

「ある?」

「勿論よ姉さん」

夕姫が聞くと答える純情な妹。ただしまともに答えたことはあんまりない。

「赤いインクを指につけて【シンデモ スキ デス】って百回書いて送ったよ」

「おまえかああああ！！あの恐怖のお手紙おまえかああああ！！！」

反泣きになりながら夕姫は夜雨の首をつかんで揺さぶった。ソレを聞いていた恵理瑠も若干引きつっていた。

「あんたらさあ、姉妹&レズは卒業したほうがいいわよ？」

「レズじゃない！！！」

「そうそう、穢れなき純粋な愛よ」

「お前も誤解招くようなこというなあああああ！！！」

衛は五月蠅いなと窓のほうになんとなく目を向けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんかと目が合った。

「あ、赤澤さんじゃん」

和美が窓を開けて教室内に引きずりいれる。足立が赤澤から離れていった。

つていうか、ほとんどの男子が

「赤澤さん、何してたの？」

「わたくし、わたくし・・・」

目をキョロキョロさせながらもじもじしている。  
和美も笑顔で一步下がった。

「……誰？」

恵理瑠はゆびをさしながら夕姫に聞いた。

「あれ？赤澤さん『赤澤 血冬』えっとおなんていうか、怖い」  
「……姉さん、漢字違うよ。千冬さんね」

衛は無表情でソレを眺めた。そして直感的に手紙を出した。

「あああ……それはあ」

どうやら、彼女が手紙の持ち主らしい。

「ア、赤澤さんが書いたの？」

和美は二歩下がってから聞いた。

「え、ええ ええ……そうなのですわ w a t a k u s i g a  
a i t a n o d e s u w a ……」

い、意味分からん……最後のほうが特に聞き取りづらい  
そこで初めて衛の顔が引きつった。

「あああ……すきすきすきすきすきすきすき……」

なんか呟き始めました。

夜雨はそこでやっと周りを見始めた。

(・・・妖怪?)

一番酷いことを考えている主人公でした。

「申し訳ありませんが、お断りさせていただきます」

丁重にはつきりと断った。ハジメから断る気だったようだ。

「わたくし・・・」

ぼつり、赤澤は呟く

長い髪の毛で顔が隠れていてよくわからないが声は震えていた。  
衛は赤澤の傍に行き手を握った。

「アナタなら、いい人見つかりますよ・・・すぐにでも」

「ああ、衛さん・・・」

普通に見たらいい凶なのに、どうしてこうもホラーにしか見えないのだろう。恵理瑠は書いた人が誰かわかったからか、もう手紙に興味をうせていた。

「わたくしには、アナタじゃないと・・・」

しかし赤澤も引かなかった。

「夜雨ちよつとさあ『アタシの男にテエだすな』って言ってきてよ」

「何故私が？」

「暇だから」

恵理瑠特有の適当振りだった。

夕姫も呆れたような顔で恵理瑠をみた

「恵理瑠がいけばいーじゃん」

「え〜」

まさかのえ〜がでた。

「衛さん、わたくしのお方になって」

ぎゅう！と衛に抱きついた。

女子の一部が「ああああ！！」と叫んだ。

「体温、低いな」

全く持って何を考えているのか分からない衛のコメントはそれだけだった。

「くどいわよ、お前」

恵理瑠が赤澤を衛から引き剥がした。

「何をするんですの」

「あたしはね涙を武器にする奴とか甘ったれた奴って嫌いなものよ」

「わたくしは・・・」

「一度拒まれたんなら退いて、また出直してきな！！」

教室の扉を指差してかつこよく言い放つ恵理瑠だが、はたから聞い

たら苛めのようにも聞こえるぎりぎりラインだ。

「ううう・・・分かりましたわ。わたくしまたきます」

なぜか扉からじゃなくて窓から出て行った。ちなみにココは三階です。

皆が悲鳴あげながら窓の下を見た、が赤澤の姿はなかった。本気で恐怖するクラスメートたち。

「恵理瑠・・・」

衛が恵理瑠に呟いた。

「恋愛ネタに飽きたろ」

「あ、ばれた？」

どうやらさっさと終わらせたかったようです。

結局赤澤さんはしばらくの間学校の七不思議となっていたのであった。

「やっぱ今時はホラーよね！」

「昨日なんか金縛りにあった！」

「ア、それ私だ姉さん」

「おまえかああああああ！！！」

## 第六話（後書き）

感想があれば書いてください。

## 第七話

今日は雨時々雷

そして学校のある日だったが……。

「今日は学校おやすみだって夕姫。……夕姫？」

布団にくるまっている。

ももこと浮いた布団の中でかすかに中身が震えている。……可愛  
い。

「姉さん。」

つんつん、

びっくう！……！

「……」

「……にたあ」

「口で【にたあ】とかいうな……！」

ばー！……と布団から出たとたん。ベストタイミングに雷がなった。  
ぴっしやああああああん

「うにゃあああああ……！」

夕姫は怯えて勢いよく夜雨にしがみついた。

「今日は両親は温泉旅行に居ちゃってるから帰ってこないしネエ」

よしよし、と頭を撫でる。

震えた姉さんも可愛いが少々苦しいぞ？

嫌がる人に抱きつくのは嬉しいが

「姉さん……しってる？【雷女】の話」

「ひいっ？！」

体が硬直した。怖い話しが苦手な姉さんらしい反応を見てついにやけてしまうが、あえてソレは隠して神妙な面持ちで続ける。

「丁度、こんなふうに嵐直前かというような天気の中で【がつん、がつん】って音が響くんだったって……」

「あ、あああ雨のおお音だよ……」

「雨の音でガツンはないと思うけど？まあ、それでね」

その音の響くほうに目を向けても誰もいない。気がつけば音は止んでいる。なんとなしに後ろを振り向くとそこには

「うにゃあああ……！言っちゃ駄目！聞こえない聞こえない……あーあー」

耳をふさぎながら大きな声で半泣きになりながら喚く女子高校生……ある意味希少価値高いと思う。というかレア？

「ふふ……姉さん、さっきの話は……」

がつん！がつん！……

「……………」

「……………なごきの話は……………なごき。」

「顔が真っ青だ。」

自分で創作したくだけない怖い話だったが、こつもベストタイミングに実際おこるとなると……………ええ、怖いですとも。

ガツン！！ガツン！！

「よよよよ……………よんでるみたいい？」

「誰を？」

「し、知らないよお！？？」

ガツン！！

夜雨はトコトコと音のほうに歩いていった。

「あ、あう！あたしも行く！！」

「……………」

窓が開いていた。

「……………閉めていたはずなのに……………」

「ええええ！！怖いこというなよお！！」

びっかああああ

……………背後に何かが居た。

どっかああああああああん

「うぎぎやあああああ！！！？？」

「姉さん、五月蠅いよ」

頭を叩かれ正気に戻った。

背後に居たのはずぶぬれの恵理瑠だった。

「恵理瑠さん。何しているんですか。人の家で」

「ちよつと助けなさいよ」

「ソレが人に頼む態度ですか」

とか言いながら窓を閉めた後夜雨はタオルを恵理瑠に投げつけた。

「……………衛さん、どうしたんですか」

恵理瑠の背中でごつたりしている衛に目を向ける。若干ホラーで倒れかけていた夕姫もびっくりしたように恵理瑠を手伝った。

「……………ちよつと、ドジッた」

「何を？」

「仕事、色々あるのよ」

「高校生なのにこんなになる仕事ってなんだ!？」

恵理瑠は慈愛に満ちたいい笑顔を見せた。

「知らぬが仏」

黙っていたほうが良さそうだ。

夜雨はあったかい飲み物を用意しながら外を見た、黒服のスーツを着た人たちが雨の中走り回っている。

……………なにかに足でも突っ込んでいるのだろうか？衛の着ている服が執事みたいな服に見えるのも気になるが……………深読みはすまい。巻き込まれたくないしね。

「はい、夕姫。あつたかい飲み物」

「アリガト……ってアタシだけ?!」

「私のもあるけど?」

「いやいや、普通はこっちの死にかけている人じゃないの!?!」

夜雨は興味のないものを見るような目で恵理瑠たちを見た。

「……。お風呂入れといた。先に入ってきてなさい。コレは見とくから」

「……ありがとう。感謝するわ」

夕姫が「案内する」って行って歩いていった。

さて………。

衛の服を脱がす。意外と筋肉質。……めんどくさい服だなコレ。

やっと上を脱がすとあつたかいお湯につけたタオルで体を拭く。と  
ころどころ傷が見える。

…… 本当に何しているんだろう。

相当疲労しているのか目を覚ますようには一向に見えない。

つめたい雨風の中さらされていたのだろう。体温が低い。

この真夏の中で、ストーブやコタツを出すのはめんどくさい。せつ  
かく片付けた毛布も然り。こいつじゃなくて姉さんだったら何でも  
動くけど………。

「……。」

タオルで拭くのを止めて父の服を着せる。

うちの父のほうが数段も大きかった。……こいつパジャマにあわな  
いな。

自分でいれた飲み物を口に含む。体の中があつたかくなつた気がした。

「……………」

……………。

「なあー夜雨……って何やってんだ!？」

「え?何って、体の中からあつたためてやるつとホットミルクを口の中に入れようとしてる」

「死んじゃうってそれ!マジで!!やめい」

コップを奪われてしまった。

せつかくの人の行為を。

「うっん、確かになんか寒いね」

「雨で部屋の温度下がったのかもね。」

「この人、大丈夫かな　って口の中にミルクを流そうとしない!!」  
「!」

「だって、姉さんが心配したんだもん……………」

拗ねたような顔を見せると夕姫が困つたような顔をした。

「夜雨ってさあ、なんでアタシに執着すんだ?」

「好きだから」

あっさり返された。

「好きにしても度が……」  
「愛してる。」

真剣に言われるとなんか自分の身に危険を感じた。

「あたし、ノーマル……」  
「私もノーマルだよ、姉さん」  
言っていることが矛盾している。

「お、親子愛ってこと？」  
「半々？」

え、その半分ってなんですか？

「前世の記憶って信じる？」  
「え？う。うーん」  
「まあ、信じる信じないはおいといて、私にはある。過去の記憶が」

しかし過去は過去。今は今……割り切っているし、頭では分かっている。だが、

「もう一つの魂が反応する」  
それが私の気持を惑わせる。

「だから人に興味持たなかったの？」  
「いやそれは私の性格。」

せいかくかーい……………。

「私の本当の性格は……………どうなんだろう過去の記憶を見れば見るほど心が奴に移り変わるような気がしていく……………怖いよ。姉さん」

「……………今半分嘘ついたろ」

「うん。良く分かったね」

本気で殴りたくなった……………。

そんなこないっっていると頭から湯気を出した恵理瑠が出てきた。

「ちっす、いいフロでした。」

夕姫の飲み物を奪う。

「ああ！」

「ぷっはあ ……!!お？雨止んだわね。帰るわ」

ソファに横になった衛を軽々と持ち上げる。

「んじゃ。また明日。」

「明日って!!」

窓を開けて出て行った。素早い行動に二人啞然とする。

「っていうか、いい加減ちゃんと玄関から出て行きなさいよ」

雨上がりの空は灰色の雲が広がっていた。

明日は……………ハレかな？

## 第七話（後書き）

謎の多いキャラたち……その真相はいつか明らかに……ならないかもしれせん。

## 第八話

気配を消すように音を立てずに階段を上っていき、そして突き当たりの部屋の扉をゆっくりと開ける。広がる部屋は意外と質素で使いやすさ重視だ。この部屋の持ち主らしい単純な部屋だ。

窓を開ける。

ベランダにでて外を眺める。うん、今日も暑い。

「ちゅと……」

……  
……

ちゅんちゅん

「うぎゃあああああああ……!」

今日も今日とて麗しい声の悲鳴が上がる。  
うん、頭痛くなるぐらい大声だね。

「姉さん、おはよう」

「よよよよ夜雨！……なんてことを！」

何をしたか気になるだろうケド、内緒(藁)  
ふふふ

「はやく降りてこないと、朝ごはん冷めるよ」

「声をかけてくれれば良いのに、毎度毎度」

「それじゃあ面白く……起きないでしょ」

はやくねろ、と先に下に下りていく。

リビングはすでにクーラーがついていて涼しい。もう冷めてるかも

……ご飯。

「おはよ〜ってあれ？母さんたちは？」

「デート」

二人はいくつになってもラブラブだ。

「ふーん」

ラップをのけてご飯を食べ始める。

「……」  
「……」

沈黙。

「最近、多くない？」

「何が？」

「母さんたちがでかけんの」

「そうだね。でもいいじゃない」

「ん？」

もぐもぐとご飯を食べながら首をかしげた。

「二人つきりになれて……ぽ」

ぶはあ！！

口からご飯粒を吐いた。うわあ……汚い。  
ティッシュを渡しながら簡潔にたしなめる。

「汚い。」

「お前が変なこと言うからだろ！！」

「姉さんは初心ウツだね」

「……………」

……………。

「で？」

恵理瑠はぼさぼさのあたまで二人を見た。

「朝っぱらから何よ ふぁ」  
「もう8時だよ。墮人間」  
「うっさいわねー、姉 妹何とかしてよ。この餅女」  
「餅？それはどういう意味かな？男女」  
「喧嘩売ってんのか？買うぞ」  
「ちよ！二人やめい」

せつかく見逃げ道をつくって来たのにこれでは意味がない。

「っていうかさ、恵理瑠の家ってでかいのな」  
「ん？ああ……そう？」

ガチャ……恵理瑠の家から衛が出てきた。眠たそうにあくびを一つしたあとポストから新聞紙を持って家の中に入っていった。

「え？ここ恵理瑠の家じゃ」  
「まさか……同棲？」  
「そうだけど？二人で住んでるし」

卒業後はご結婚ですか？！

「何その顔」

ショックを受けた心が表に出たのか、恵理瑠は変なものを見るような目で二人を見た。

「まるでギャルゲーの主人公だね」  
「そんな変な関係じゃないから、兄弟みたいなもんよ」

「ふーん。」

何故か夜雨に見つめられた。

「私達にもそういうシチュエーションほしいね姉さん」

「いらねえよ!!」

外で喚かれても近所迷惑なので二人は恵理瑠の家に招かれた。入ったとたんに広い階段。真新しいのはできたばかりだかららしい。

「お邪魔します」

「ん?……おはよう。」

「はよ」

リビングに入ると長いソファに身を沈めてリラックスした衛がいた。二人は兎に角衛と挨拶を済ます。女の子が沢山いても特に気にならないのか新聞紙を読んであたりしていた。

「夜雨ってさ、なんで姉に執着すんの? レズだから?」

「喧嘩売ってる?」

「それともさあ、その怨念のせい?」

「!」

怨念の言葉に夜雨は反応した。

「……知ってるの?」

「見えた。」

「恵理瑠は巫女の血を継いでるからな」

衛は興味なさそうに付け加えた。

「そう」

「ねえねえ」

恵理瑠が興味津々に夜雨の服の裾を引つ張った。

「御被いして上げようか!？」

「そっだね……帰ろうか姉さん」

何故か恵理瑠がもっているのは竹箒と塩。きらきらと悪意のない顔で夜雨を見上げている。うん。殴りたいです

「大丈夫よ!!任せて」

そう言うやいなや返事も聞かず箒を持ち上げて勢い良く振り落とすた。

すっぱああああああああああん!!

「ごぶん!」「つぎや」

「夜雨うつつつつつつ!!」

倒れた妹に抱きついてゆすった。

「待て、脳震盪を起こしているかもしれないから、ゆるるな。ソファに……よし」

夜雨をソファに運ぶ。

「これで怨念は引つ込んだはずよ!」

「だったら夜雨の魂も引つ込ませよ!!」

口から白いものが出ている。衛は頭痛そうに恵理瑠を見た。

「いい加減にしろ。お前のお払いは手加減がない。」

「なにさ〜」

「てか、怨念つて何?!……あ」

恵理瑠に聞いても仕方ないか、と口をふさごうとしたが恵理瑠はあっさり答えた。

「前世の記憶よ。」

過去にも夜雨がおんなじことをいつていた気がする。だからといってもそれだけでは全く意味が解らない。

「あのね、多分明治前らへん。あんたとこいつは幼馴染で夫婦だったみたい。」

夜雨の前世は男で寡黙で表情に乏しかったが仕事はきちんとなすし、幼馴染だった夕姫の前世の妻には優しくかった。

仕事はこなすが冷酷で情がない。仕事をミスした奴は誰であろう即座に手打ちにかけたみたい、それだけじゃなく他に執着がない分、妻への執着は強く。妻が他の男と会話しているだけで嫉妬し相手を殺してしまうぐらいだった。

「……重」

「そうね〜」

「思い当たる節は……ある、かも」

ソレに耐え兼ねた妻は離婚を申し出たが軟禁を受けたのち自殺。男

は後を追うように自害したがこの男の執着は生まれ変わっても魂の記憶として残り、夜雨の感情に作用しているってわけよ。

「だから今引つ込めたから、ようやく夜雨のちゃんとした感情がで  
きるってわけ。」

「それは……………」

興味あるかも。

まともな夜雨……………うわぁ、わらいが。

「…………ん」

目覚めた。

「おい、お茶を……………」

衛と目が合う。

「……………」

「……………」

「み」

み？

「……………見てんじゃないわよ！」

……………。

.....。

はい？

「頭大丈夫か？」

そ……つとあたまを触れた衛にたいし過剰に反応した。

「触らないで！し、心配なんてされたって嬉しくないんだから！」

……え~~~~~

「ワザと？」

「病院いく？」

「ゴメン。あたしのせいで……く」

「何で悔やんでるの?!」

妹が壊れました。

第八話（後書き）

妹が……

## 第九話（前書き）

悪霊を恵理瑠によって引つ込めた夜雨であった。

## 第九話

「あ、悪夢……!!」

夕姫は珍しく自分から目を覚ました、理由。夢見が悪かった。唸りながらリビングまで下りていくと、トントンという包丁の音が聞こえた。

「あれ？夕姫起きるの早いじゃん。毎日そうだったら良いのに」

「夜雨？」

「？ 何？」

夜雨が白い人に見える!!

「てか昨日はツンデレだったような。」

「冗談だったのにどん引きされちゃったな」

困ったように夜雨は笑いながら食卓の上に朝食を置いていく。いつもの夜雨と同じような作られたものだ。ううむ、どうもどうも、同一人物とは思えない。

「はい、いただきます。」

「え、あ、いただきます。父さんと母さんは？」

「まだデートから帰ってきてないよ」

「ふーん」

こうしてみると普通だが……目が合った。微笑まれた。

し、白い!!

いつもと違って黒くない、白い……なんだろう、コッチのが怖い。

食事もそこそこにして学校に行く準備を整えて家を出た。

いつもと違ってぎりぎりではなく五分も余裕があった。

「あ、双子がいる」

和美が心底吃驚したように指をさしながら笑った。

「笑い事じゃない!」

「え?」

「ちーす」

ガラ……夜雨を壊した(こっちが正常) 張本人が教室に入ってきた。  
夕姫が飛びつく。

「夜雨戻して!?!」

「ああ?戻してっていつても、いいじゃない。黒くなくて」

「ソレはそれで怖いの!?!」

何か裏がありそうぞ。

「我俣ね、言っとくけど24歳の最後の誕生日にアンタ殺される  
運命だけどいいの?」

「殺されるの?!」

「ヤンデレだからね」

「そつゆう問題?!」

「よくあることよ。」

「ないよ?!」

ぎゃーぎゃーコツチで喚いているとその横をのんびり衛が通った。  
我関せずといった感じに席に着いた。

「・・・・・・・・」

横目で夜雨をちら見する。

いつもつまらなそうな顔で読書したり興味ないような顔で教室の全体を見つめたりしていたが、今回はソレがないらしい。まあ、素でさめた奴なんていないのかも。

「・・・・・・・・!」

目が合った。

「コト」

・・・・・・・・。可愛いかも

過去なら目があったらダークな目つきで睨まれてただけだろうけど、今回は頬を染めながら微笑まれた。……のろいってスゲー。……別に変な意味じゃなくてさ。

「何か……ようかな?」

「いや、変わったなって」

「そう?確かに気持ちは軽くなった」

そう言って微笑む彼女は可愛かった……

「夜雨さん久しぶり」

「颯太くん」

「『くん』?」

颯太が信じられないものを見るような目で夜雨をみた。まあ今まで存在無視だったから仕方ない気もするが……それほど今までの夜雨の行動は酷かったのだ。

「夜、夜雨さん!! ついに想いが届いた!?!」

「違うだろ、普通の反応だろ!?!」

足立に突っ込まれて少し落ち着く颯太。

「いままで聞く耳どころか存在すら無視されてきたけど」

「自覚あったのか。」

「告白を聞き入れてくれそうだ! 足立俺頑張るわ!」

「お、おう、よくわからんが頑張れ」

恵理瑠ともめていた夕姫はその声に反応して振り向いた。

自分の大切な愛しの颯太君が、夜雨に告白!?!?

「やっば戻して!?! 死んでもいいからああああああ」

「えー」

衛は横目でその二人を見ていたが不意に視線を感じてそちらの方向を向いた。

「……………なにか?」

夜雨だった。

今までは刺すような視線だったのに、今回は優しい視線に変わっているから一体誰かと思った。目が合うと恥ずかしそうに視線を下にした。いつもなら親指を下にするだろうに。

「あの、……前に事故でその……」

事故?……キスのことか

「それで?」

「もし、君がよければ……」

「もう一度って?」

「え、恵理瑠さん!?!」

にたにたと嬉しそうな恵理瑠が立っていた。でたなアホ魔女

「ち、違いますよ!?!気にしないで……」

「え……!!キスしたの?!」

颯太以外は知ってます。

夕姫が悲しそうに颯太を眺め、頬を赤らめた夜雨が衛を見つめ、にたにたと馬鹿は笑う。

外野はそんな力オスな教室に若干慣れつつあった。なぜなら一癖も二癖もある奴が多すぎるから。

「ん?」

恵理瑠の周りに蚊が飛び回る。

(つぎ)

恵理瑠は叩き潰そうと手を叩きまわるが、中々すばしっこい。

「夜雨さん、キスってそいつと恋人なの?!」

「恋人じゃない……」

「じゃあ、好きなの?!」

し……ん……

空気が固まった。

過去にもあった告白タイム再来?!

「エ……ト……」

頬を赤らめて衛を見る。つられて衛も頬が赤くなる。

どうしてこつちも恋愛ブームがやってくるのだろうか。迷惑だ

「その……」

「好きなの?」

「ココで好きとってほしい夕姫も後押しする。」

「私……」

すばあああああああああああああああん！！！！！！！

夜雨が……倒れた。

「あ、ゴメン殺し損ねた」

ぷーん、と蚊が飛んでいった。

「……………」

恵理瑠の手刀がもろはいった。

「おい！」

生きてますか？！

気絶しているのか反応がない。

なおも衛が揺らすとやっと反応した。生きてるようつで何より。

「……………」

目を開けた。

「触るな下郎」

いつもの夜雨に戻った。

## 第十話

「話はわかった」

教室の中で絶対零度を巻き起こしている夜雨は納得したようにいった。

「そのときの記憶が全くない、でも」

寒さが吹雪くほどに教室は限界に見える。

「実に不愉快だ」

クラスメイトは隅っここのほうで固まっている、夕姫も逃げようとしているが恵理瑠につかまれてできない。

「いいじゃないか、何かされたわけでもなし」

衛がそうフォローにまわるとスゴイにらみを利かされた。やっぱり

「……恵理瑠、どうにかできないのか」

「できないわね」

きっぱりと言い放ちやがった。

「悪霊がついている状態での性格もついていないときの性格も夜雨なわけ」

「それはそうだろ」

「だから消せないのよ」

「え？」

どういうこと？という顔をする夕姫。

「二重人格ってこと」

衛は額に手を当てた。

めんどくさいなこの人たち。

「まあいいわ、もう一回黙らせるわ」

黙らせちゃ駄目な気がする。

ぶん

「させん」

ばし

「いた！」

恵理瑠の攻撃を避けて逆に攻撃した。

「やったな」

恵理瑠の戦闘本能がくすぐられたようだ。目が光った。ああ……

・めんどくさいことに

「ちょっと面かしな、てか表でろ」

「結構、優勢順位を分かせてやるう。」

お互いに火花を散らせながら睨みを利かせながら外へ出て行った。ソレを止めることのできる勇者は誰もいなかった。

グラウンドのど真ん中で二人は勝負を始めた。窓から複数の生徒が顔を出す。

「なあ赤川姉、お前の妹は何かならってたのか？」

「全く？」

足立は呆然と夜雨を見た。いや常識人の足立だけではない。他の人も啞然となった。

二人のバトルはハイレベルだからだ。

「すごいな」

珍しく衛が褒めた。

「恵理瑠流、我流霸王武術を真似できるなんて」

「何そのなんとかかんとか」

「恵理瑠が作った武術法、無茶苦茶なのが多い」

あのひとらしい。

「私は私、誰かに指図を受けない」

「それはいいけどさ！忠告は聞きなさいよ」

男同士ならカツコイイでおわるが女の子同士だ、先生も止めに入っ  
た。

「くらあ！何しとる」

「「じゃまあすんなああああ！！」」

「ひい、すいません」

女子高生に一掃された教師たち。

「ねえ誰か止めて！？じゃないと困る」

夕姫が必死に懇願するが止めれるものなど……………

「はあ……………仕方ないな。」

窓から誰かが降りていった。

「え？」

グラウンドのど真ん中で二人はお互いに負けないように牽制し合う。

「おらああああ」

「はあああああ」

カウンターが決まりそうなとき衛は二人の手を受け止めた。

「もうやめろ」

「邪魔！人の勝負に水さすんじゃない……」

「むやみに拳を振るうなというのが分からのか！」

空いた手で恵理瑠は衛を殴り飛ばそうとしたが捕まれたてで一本背負いをされ地に倒れた。

「つつたー」

ぎろ、次は夜雨を睨む

「……不愉快。帰る」

そのまま背を向けてもんの外へと出て行った。  
受け止められた手に感じる違和感を不愉快に思いながら……。

「衛君って強かったのね」

「うん、びっくりだ」

和美の言葉に素直に頷く。

ぴーぴーやるうーという野次が飛ばされる。

「……………」

倒れていた恵理瑠の目が光る。

「（ギク）！？」

「恵理瑠我流霸王武術奥義！！！」

いつの間にか衛の頭上高くいた。

「地獄落とし!!」

ようするに殺人級の踵落とし。

そのときは皆が目をそらしたそうなの……。

「死んでないよな!? 死んでないよな?!」

怯える夕姫の声だけ響いたそうなの。

## 第十話（後書き）

何がしたいのか、わからなくなってきた今日この頃

## 第十一話

その日の夜、嫌な夢を見た。

真っ赤に、真っ赤に滴る赤クロイ血……。

誰の？これはなに？どうして、こんなこと……。。

……………。

「夢」

夜雨は手を見つめた。汚れていない、ごくごく普通の手

「淀んでる……」

天気も空気も、自分さえも……。

時計を見ればマダ朝の3時だった、しかしもう一度寝ようという気にはなれず、とりあえずベットから身を起こし、部屋を出てみた。

隣の部屋には可愛く ゆき と書かれた看板がある。

いつも見慣れたはずの文字も、今はなんだかしよぼくれた物に見えた。

がちや

扉を開けて夕姫の部屋に入っていった。只でさえ起きるのがおそい彼女は今この時間帯もすやすやと眠っていた。

「……………愛してる」

ギシ……………ベッドの上に乗れば軋む音が響く、しかし彼女はおきる気配は一向にない。

「愛してるのに、あなたは私を見ない」

ならば

「ならばいっそ……………」

自身の手が柔らかかそうな愛しい人の首へ伸びる。

「ん……………」

くすぐったそうに身をよじる

「殺したい、殺したいコロしたいコロ……………」

違う、違う違う。

「ごんなの私じゃない……………」

真っ赤な血に染まる手の下にあるのは白く若い娘……………見慣れた少女

最近その少女が夕姫に見えてならない……。殺したくなんかないのに、別の感情が『殺せ』と命令する。

このままでは、近いうちに殺してしまう。誰の感情かもわからないまま姉を殺したくなんて、前世なんてものに惑わされるぐらい自分は弱いとは信じたくないけど、信じてしまえばこの狂った感情が私のものだと認めなくてはならない。どうすればいいの？どうすれば

ぎり

「う」

「!」

気がつけば首を掴む手に力を入れていたようだ。夜雨は自分から逃げるように部屋から出て行った。

ココを出よう、出て行こうそうしよう。それが一番の愛だと思っ

服も着替えてお金もそこそこに持って出て行く、行く当てなどない。

とにかく夕姫にもう二度と会えないようなところへ。お互いのために走っていると誰かに腕をつかまれた。

「!」

「何急いでるんだ」

衛だった。いずそや見たような執事みたいな服装だった。

「はなして、私は出て行く。夕姫の居ないところに」

「イキナリか？」

「そうだよ！だって今すぐじゃないと……」

目頭が熱くなっていく。

「いずれ夕姫を殺してしまう気がして」

ぐい！

「きゃ」

夜雨は衛に手を強く引っ張られ抱きしめられた。

いきなりのことで毒を吐くこともできない夜雨は只流れのままに身を任せることに……。

「大丈夫、君は強い。自分に負けることなんてないだろう。」

「……。ありがとう」

しばらく黙って抱き合っていたが、視線を感じて目を開けると。

「……………」

少年が体操座りして見学していた。

「マセガキ」

「女誑し」

二人が言い合う。

「使用人の分際で恋人といちゃつくな」

「恋人じゃない」

「違うなら何故抱き合うのさ」

「黙れ餓鬼」

「主人になんという口の利き方」

話についていけない私。

「！」

「一つ気がついたことがある、衛がずっと私の手を握っていたことだ。」

「とりあえず解ったことがあるぞ」

小学生ぐらいの少年はエッヘンと得意げだ。

「三角関係で悩んでるんだな！！」

「す

「いったああああ！！！！」

衛は無言で殴った後首根っこを掴んだ。

「全く違う」

「だからってなぐんなくともいのにさ！！」

涙目で訴えている。

「あ、でももう一つ解ったぞ」

「何をですか」

「行くところがないなら、僕の館で住み込みで働けばいい!!」

.....

「え?」

「行くところがないならボクの家で働くといい!!こいつみたいになつていただだだだ!!」

頭をアイアンクローで圧迫する。

まあ、怪しいといえば怪しいけど……しかもうざい。でも、まあこのままホームレスまがいの生活するよりは、まあ、ましなんじゃないかな。

「じゃあ宜しく」

「!!!??」

「おう、ボクが主の神国寺カンコクジ雅だ」

うつわあ、偉そうな名前。

「使えるが良いぞ」

「……殴って良いかな?」

「ドウゾ」

「ええええええええ!!?なんで?かつこよくなかった?」

どこが?どうみて?

「え〜」

しかしまあ、コレで住むところは確保できた。それだけは感謝しようかな

「メイド服は洋風かな、和風かな？どっちがいい？」

……マセガキ

## 第十一話（後書き）

お久しぶりです、感想などあればドウゾ。

## 第十二話

神国寺カシコクラジ雅という少年に拾われ、まあ衣食住の心配はなくなった、が問題はやっぱりあった。

「学校どうするのだ」

子供に言われるほど腹ただしものはないな。

黙っていると主雅あまじはうむうむといいながらうなずいた。

「まあ家出したも当然の身だからな！行きぬくろっ」

「たかが10歳の子どもに何が分かるっていうのか……さて坊ちゃ  
ん学校のお時間ですよ。」

「お前こそ学校の時間だろ、大人がそんなんじゃ未来は全く不安で  
すなあ」

そこまで言ったあたりで頭を掴み、笑顔で呟くように囁く

【餓鬼がほざけ……】

恐怖で固まったのを確認するとぽんぽん、と頭を撫でてやる

「いつてらっしやいませ、お坊ちやま」

「うん。いつてくる」

とじとじいやに連れられて学校へと向かっていった。

「ちっ」

「夕姫？どした？」

「和美~~~~！」

「うわ！鼻水垂れてくんナ！」

朝教室にて夕姫は沈みきっていた。というのも妹夜雨が朝忽然と姿を消していたからだ。夜雨の服やお金が消えていたから家出だろうと判断して警察には連絡したが……

「どうして急にいなくなっちゃうのよ〜！置手紙もないし」

「家族円満だったのにな」

よしよしと和美は夕姫の頭を撫でて慰める、アア胸の辺りが濡れてきた……鼻水でないことだけを祈る。

「大丈夫いつかは戻ってくるわよ」

「本当？」

「もっちゃん！……冷たいか温かいかは別としてね」

「？」

がらら

「HRをはっじめまあ〜す」

いつもながらハイテンションな原先生が入ってくる。帳簿を取り出すと欠席者の確認を始めた。

「おや、赤川さん妹さんはお休み？これはもしかや先生と夕姫君とが結ばれるための運命への架け橋ができあがっぶうっうっうっうっ！！」

「先生、この子に近づかないで」

和美が先生を追い払うと心配そうに夕姫の顔を覗き込んだ。

「大丈夫？」

「うん、サンキュ」

夜雨のいない朝も、昼も、時は進む……当たり前のことだけど、悲しい。

いないことが当たり前になるなんて、悲しすぎる。勝手な自己判断だってことは分かっている、例えば他の知らない生徒が休んだところで自分は気にも留めないだろう、分かっている。でも、こんなにもイライラするのはどうして？！

「ゴメン、なさい……」

ゆらり、陽炎のように実感のないような動きで席を立つ。

「体調不良で……帰ります」

「大丈夫ですか！？先生の愛のほうよぐはあああああああ」

「うん、そうしな。明日には治せよ」

和美にも背中を押され教室を出て学校を出て家へと急ぐ。

夜雨……どこいちゃったの？

「あつれ〜？赤川じゃん」

「颯太君……」

いつものように樂觀とした態度は夕姫の心を少しでも安心させたように思えた。いつも空気を読めない筈の颯太だが、いつも明るい夕姫が暗いことにはさすがに気がついた。

「なんかあったか？」

優しい声かけに夕姫は泣きながら事を説明した。

「夜雨さんがね〜、大丈夫！きつと戻ってくるよ！だから泣かなくても良いよ！」

「うん、ありがとう」

好き。

優しくて、明るくて、屈託のないこの少年が……。いつも心を明るくさせて、安心させてくれるこの少年が……。颯太が好きなのだ。

私は、颯太君が好き……。

「おっと、もう行かなきゃ今日発売のアフロ・ナムコのCD買いに行かなきゃ」

「あ……」

「じゃあな、元気出せよ！」

「ま、待って!!！」

颯太の服の裾を両手で掴んでしまった。

「アタシ……」

駄目……コロで言っちゃ……でも、口が……

「颯太君のことが」

止まらない!!！

「好き」

歯車は狂う。

一つが止まれば他も機能しなくなる……坂を転がる小石のように……。もはや誰も止めることはできない……。

「どうして」

二人のすぐ近くに夜雨は居た。

(まだ学校に時間のはず、夕姫はサボるような子じゃないのに……  
いいや、それよりも何故?)

何故こんなにも胸が痛く苦しく、憎いのだろう!! ああ、殺してやりたい! 今すぐ愛しい夕姫の首を締め上げて私に殺される絶望と恐怖を宿したその瞳から映る自分を眺めてやりたい、そんな衝動に駆られるのだろう……。

こんな感情私のものではない!! 断じて

どうして?

アナタのために私は去ったのに、アナタはどうして私を苦しめる?

「どうして……?」

アナタは、私に殺されたいの?

遠くから学校のチャイム音が聞こえてきた。もう、止めることはできない私はこの感情に負けてしまっただろう……いつそ身を投げ出した方が楽だ……。

「さようなら夕姫」

私の愛しい姉よ

大嫌い

## 第十二話（後書き）

コメントのしようもありません

## 第十三話

「おう、衛！遅かったな！」

屋敷に着いたそうそうのたかだか10歳の餓鬼にタメ口をきかれるとは……。多少金をもってるぼんぼんの子どもは躡がなっていないなど、衛は雅の耳を引っ張り上げた。

「いたたたた！？なんで怒るの!？」

しかも何故怒るかもわからないようだ、これは再教育の必要がありそうだ。

「こんなことしている場合ではないぞ!！」

「ん？」

「ちーっす！恵理瑠ちゃんがきたぞぉ〜い」

助かったとばかりに雅は衛の手から逃れると恵理瑠の後ろへと颯爽と隠れた。

「んで？何が大変なんだ？」

逃げられないように服の裾を掴んだまま言うと、半泣きになりながら答えた。

「夜雨のことだよ!！」

「あら」

「どうかしたのか？」

「うん、なんかブツブツ言いながら部屋こもってた」

あの夜雨がぶつぶつ………？

いつも自信満々な夜雨が元気をなくすのは姉のことと悪霊のことが絡んだときだ。なにかあったのだろうか

「ちょっと見て来い、恵理瑠」

「何で私よ」

いきなり名前を呼ばれてつまらなそうに口を尖らせた。

「前回ちびの護衛盾係り変わってやったろ」

「それで撃たれてぶっ倒れたあんたを運んだのは誰よ」

言い合う二人を小さな小悪魔が見上げた。

「早く行けば？」

鈍い鈍い音が広い一室で二重に響き渡った……。

こんこん

「入るわよ」

返事も待たず恵理瑠は勝手にドアノブを捻るとさっさと部屋に入った。全く持ってマナーというものを無視する女であった。ここまでくるといつそ清々しいものである。

入るかはいらなにか悩んだ末に衛も後に続いた。

昨夜きたばかりの部屋は質素で必要なものも余計なものも、何もない。

「……？」

そう広くない部屋全体を見渡しても、夜雨の姿は一向に見当たらない。

「何処行ったのかしらね、便所？」

「下品だぞ女のクセに、せめて『お手洗い』と言え」

うっさいわねーと文句を言う恵理瑠は無視して進む

「……？ 紙」

一枚の白い紙が目に入った。

「あゝ、勝手に見ちゃって、怒るわようアイツ」

「その心配はない、俺たち死だ」

衛、恵理瑠、やっぱり私は弱いらしい。自分自身に勝てないのだから……

姉が、夕姫が憎くて憎くて……殺したくて堪らない、この感情を抑えることはどうやら私には無理なようで……今すぐにもこの手で首を絞めてやりたい衝動に駆られます。

私は、こんな腐った感情抜きで、純粋に夕姫のことは好きです。姉妹として、ずっと同じように暮らしてきた家族なのだから……だから私は

「……っ！..!」

衛は読み終わるやいなや部屋を駆け出した。

私は、“死”を選びます。

弱い女でゴメンナサイ。夕姫のことはお願いします。本当に短い間だったけど今までありがとう。

最後に、コレは呪いでもなんでもないひねくれてもない本当の私の本心からだけど

衛さんのこと、好きでした。

サヨウナラ 赤川 夜雨

「夜雨 ……！！！」

「ちょ！？衛！！！」

夕立からか雨が降り注ぐ、まるで二人の邪魔をするかのよう……。。

「畜生！！なんて馬鹿なんだアイツ！！！」

見えない彼女の背中を捜して走り出した衛であった……。

## 第十三話（後書き）

夜雨は一体何処に、そしてどうなるのか、次で明らかに！！

## 第十四話

「アンの馬鹿！夜雨が何処いったか知ってから走れつてのよ！」

惠理瑠は急いで雅の部屋に入っていた。

「ぼんぼん！夜雨何処行つたか知らない？」

子ども部屋で優雅に（こどものくせに）紅茶を飲みながらまったりとしていた雅は惠理瑠をみるなり目をまんまるにした。それほどふたりはもう必死なのだ。

「夜雨さんなら、恐らく学校に行かれたかと……鞆をお持ちでしたから」

「学校！？なんで？まあいいわアリガトじいさん！」

ばたばたばた……惠理瑠も衛の後を追って走り出した。残された老人と子どもは顔を見合わせた。

「何焦ってるんだ？」

「『お年頃』、というやつかも知れませんか」

鞆が重い。

夜雨はぼんやりとそう思った。雨が途中で降り出して一行に止む様子はない。雨が死ぬのを止めると止めているみたいだと思って、鼻で笑った。

死なねば死ね 殺さば殺せ

今はもう、生きたいのか死にたいのかさえも分からなかった……。

「え？夜雨が！？」

夕姫は吃驚したように衛に尋ねた。家には足立と和美もいた。

「恐らく、死のうとしてる。早く見つけないと」

「でも何処に？」

「分からないから聞いているんだろ！」

「双子だからってな！分かることと分からないことがあるんだよ！」

悲しそうに夕姫は倒れこんだ。

「どうして、私のせいなのか……？」

「夕姫、アンタのせいじゃないよ。さ、探そう」

「うん」

がちゅん！！勢い良く扉が開いた音がした。

「衛 ……！！！」

恵理瑠が衛に物凄い飛び蹴りを食らわせた。

「はあ！はあ！ぜえ……アタシ今、長距離短秒でギネス新記録出せた気がするわ」

咽ながらそう言いながら酸素を吸って吐くのと同時に叫んだ。

「学校よ！！」

それだけ言っつて倒れた。

「ちよっ！！」

「分かった！行くぞ夕姫」

「え？！アイツほつといて良いのか？！」

「大丈夫あたしら見てるし」

「いってこい」

足立と和美に背中を押されて走り出した。

運動神経のそこそこの夕姫にとっても衛の足は速かった。

あっというまに学校に着いた

「はあ、はあ、ど・どどこ？」

「こっちだ」

学校内に残る濡れた足跡を追ってまた走り出す。

一階 二階 三階 四階 ……屋上

「夜雨ヨウ！！」

バン！！

夜雨が虚ろな目で振り向く、鞆の中に入っていたヒモをフェンスに

くくりつけていた。

「何もそんなところで……そんな方法とるなあ！！死のうとするなあ！！」

「夕姫ユキじゃあさ」

いつもの優しい微笑で語りかけるように言った

「自分で死ぬのと、殺されるの……どっちがいい？」

「……っ」

「イヤだよ、死ぬのは……私だって殺したくないんだよ、でも止まらないんだ」

手が震えている

「夜雨！」

「……」

「俺のこと、好きだって書いてたよな！！返事も聞かずに死ぬ気が……」

「思い残しはもうないよ」

ヒモをつかんで首に引っ掛けようとした

「いやああああ、死なないでえ！！」

ドクン！ドクン！

『わたくしは死んでしまいます、貴方はわたくしの後を追うでしょうか』

愛しい人の手が伸びる

『わたくしは死んでしまっても貴方は生きてください。愛していました、これからも……きつと』

私は後悔した殺してしまったことに、私の手の中で体温のなくなる君を見守りながら……自分で摘み取った花を見て胸が痛んだ  
同じ過ちを繰り返すところだった……

「そうか、貴方は謝りたかったのか」

消えぬ愛と憎しみの中での葛藤、そして死してなお晴れる事のない後悔

「ただ一言『ごめん』で」

心が軽くなった気がした……今までの感情は『愛ゆえに』のことだったのか。

「夜雨!!」

気がついたら体が宙に浮いていたらしい、駄目だ力が抜けすぎだ……  
戻れない  
手を伸ばすが届かない

死

「死なせはしない!!」

衛が手を掴んだ

同じように宙に身を放り出しながら

「！」

首をつろつとしたロープにしがみついた。

「ぐー！！」

摩擦が素手を焦がす

「！、私のことなど」

「ほっとけるか！！」

掴まれた手が痛い

「男が女を好きになったら、一生かけても守るものなんだよ！！」

マモル  
「衛……」

「俺は、俺の名に恥じないように……好いた女を守る」

下から光が照らされた

「大丈夫かあ！！」

和美の声だった、その横には恵理瑠が負けた後のボクサーみたいな座り方をしている。

「おい」

「いま引き上げるから離すなよ」

「せーの」

あほ先生と足立と颯太の声が聞こえた

とりあえず、助かったらしい。

「ありがとう、それから……」『じめんなさい』

## 第十四話（後書き）

悪霊はやっと自身の感情から解放されたようです。よかったね

## 第十五話（前書き）

主人公があまり出てきません。

## 第十五話

人を好きになるっていいなあって、おもってた。

私にも恋できるかなあ……

なんて

「人が感傷に浸つてるときに邪魔じゃボケえ!!」

後ろでちよろちよろしていたあほの 原 巧教師をぶん殴る。

南 和美 最近ちよっぴり恋したいお年頃。

「痛いなあ、元気がなさそうだから相談に乗って差し上げますよ特別に」

「いまさら教師面されてもな、しかも特別っていらぬしいー」

「まあまあ」

窓にもたれて外見ていたのに隣にこられたら横気になるじゃん。

「夕姫でもみてなさいよ、好きなんですよ」

「ええ、でも君も好きですよ」

「うざげろきも」

「何語?!」

そーいう風に言い換えるやつって嫌い。

「あー、今日は夕姫病院だっけ」

夜雨のお見舞いだとか……私も放課後行こうと

「先生悲しい」

「アンタに相談するぐらいなら鬼北山先生に相談したほうが数千倍もいいわ」

「今鼻で笑いましたね〜ひーどーいー」

「うぜえ」

先生の横腹を蹴り上げると見事綺麗にはいったらしくへなへなとおれた。

「それでいいです、南さんは元気なほうが可愛いですよ?」

力なく微笑まれ少し胸が高まった。

え

いま心臓はねた?

こんなやつに?……アタシ、どんだけSなんだ

(気のせい気のせい)

「南さん」

肩をつかまれ正面を向かされた。つまり目が合うわけで

(ち、近くない?近すぎない?!うあ……い、意外とまともな顔してるじゃん、てかあ〜もお心臓ウツサイ)

「夕姫さんが颯太君に告白したそうじゃあないですかあああああ  
ああ」

「はあ?」

びいーいーいーいーと泣き出すいい年した大人。あーあ、台無し。てかアタシがコイツ好きになるとかマジないわよな

「そついや、そんなことも言ってたわね」

「どうなったんでしようがあああああああ！！！」

「自分で聞け」

最後まで言う前に殴りつけて歩いていく。

なんでアタシがこいつのために動かなきゃなんな行ってのよ。アタシ自身恋したいってのに！

「足立ー病院に行こうー」

「おー」

よくいろんな女子に「足立君と付き合ってる？」って聞かれるけど、幼馴染だからって、それ〃付き合ってるっていう決まりはないわけだし、それにな〜んかこいつって頼りないから恋とかloveとか以前に世話の焼ける弟って感じなのよね〜。どうせなら昨日の衛君みたいにかっこよく現れてほしいもんよね。

「ねー、足立ってさ〜」

「ん？」

「好きな子いる？」

「え？！え、や、い、いないけど？」

何きよどつてんのコイツ、もしかしてあたしのこと好きだったとか？……「ごめん、あんたは無いわあ〜」

「あつそう」

「え」

「あたしたちいい幼馴染でしょ？いつでも相談に乗るわよ！」

そう肩を叩いてやると苦笑いしながら肩を落とした。分かりやすいわねホント。だから駄目なのよ

やっと病院について階段を上がり、303号室に入る

「よ」

双子と衛と恵理瑠と、知らない子どもがいた。

「従兄弟の子？」

「色々だよ、で？手ぶらでお見舞いかな」

「あんた無傷のクセによく言うわあ夕姫もそんな付つきりにならないくてもいいんじゃないの」

「だってえ、心配なんだもん」

衛の腕を見る左肩包帯ぐるぐる。いたそー、あゝあ、アタシにもここまでしてくれる男がいたらなあ

「元気そうね。じゃ、帰ろっつと」

「うん、帰れ」

「ちよつとまってはやくない和美！てか夜雨も！」

「私には姉さんがいればいいわ」

「ちよおおおおおい！！そのネタはもういいよあ！！」

室内和気藹々と和やかになる。

「あ、そうだ夕姫ってさ颯太とどうなった？」

「うぎゃああ！！聞く？」ココで聞く！？」

真つ赤になりながら口を押さえてきた、ちょガード固いつて！死ぬよ？酸素クレ！！

恵理瑠の「皆知ってるって」の一言でやっと解放された。

「うん、颯太君ね外国行っちゃうんだってお父さんの転勤で」

「あいついろんな意味で大物だわ」

てか難儀なやつに好きになったりなられたり、コイツもかわいそうつつつか……奇人だわ

「それでね、10年戻ってこれないんだって」

「長！！長くない？お父さん何者だよ！」

「私ソレでも待ちたいっていったんだ、そしたら」

うん、10年経っても忘れなかったら迎えに行くよ

「って」

「アイツほんつと空気読めないどころか、さいつてえーだな！！」

王子様のナリぞこないみたいな

「そついえば、彼今は何処に？」

「空港じゃない？」

「急だな！手続き済んでんの！？」

みんなで窓の外を眺める。丁度外に飛行機が飛んでいる。心のそこから思った。

落ちたらいいのに

「じゃあ、リアル帰るわ」

「うん、ありがと〜ばいばい〜」

とどここ、もう夕暮れ時

痴漢とか出たらどうしよう、なーんて

「はあ、はあ」

.....。

「はあはあ、はあ」

声(?)が近くなってきた

「はああ、あのお」

「きゃあああああああああ!!!」

護身用に習ってた合気道で先制攻撃をかましてみた。敵はあっけなく倒れた。

「NO」

「あ、原じゃん」

先制かけた相手は先生だった。紛らわしい

「夜道は危ないっていいに走ってきただけです」



「ぐはあ あああああ  
「

当面、告白できそうにもないわ……私も難儀なやつ好きになったも  
んよね。まあ、振り向かせてやるわよ、それもこれも『愛ゆえに』ね

## 第十五話（後書き）

恋愛をちまちま書いていきます。一話ぐらいまでは  
べしぞお付き合ってくださいませ。

## 第十六話

俺はいつもお前のことを見ていた。でも、お前は俺を見ていない。親が小さいころにさせた「結婚式ごっこ」覚えてるか？お前だけ着飾って俺は親父のネクタイだけ首にぶら下げて……お前にとって只のお遊びだったにしても……俺は結構本気だった。

だから……

「ねー、足立ってさ」

「ん？」

「好きな子いる？」

「え?! え、や、い、いないけど？」

それは赤川の妹のほうの見舞いに行くときの道中だった。顔が赤くなるのは自覚していたけど、和美がコツチを見なかったのは幸いだった。

「あつそう」

「え」

「あたしたちいい幼馴染でしょ？いつでも相談に乗るわよ！」

言われた言葉は悲惨だった。

つまり、いい幼馴染「友人」恋愛対象ではない。とはっきりと告げられたのだ。しかも好きなやつから相談に乗るって……。

俺はお前が好きなんだよおおおお!!!!

生まれてからずっと俺足立 弘瀬（名前で絶対呼ばれないあたり忘れられていると思う）は南 和美のことが好きなのに、今更つられるなんて……自分で言うのもアレだけど、悲しすぎる。  
ああああああ、俺って不憫……。

「って、俺に言われてもナ」

病室の窓側で俺は衛と話をしていた。相談に乗ってくれずとも話を聞いてもらえればいいさ。俺ってそういう奴だろ？っていったら真相かわいそうなものを見るような目で見てきた。

「……新しい恋でも見つけたらどうだ？ソレが駄目でも別のもので活かすとか」

「活かすって……なにを？」

不憫を？

「……」

コイツ駄目だって顔をされた。ゴメン困らせて！

「ごめん、悪かったよ。サンキユな、じゃあ」

扉を閉めて帰ろうと顔を上げた瞬間。

ぐにゅ

………なんか柔らかいものを踏んだ。

おそろおそろ下を見ると貞が

「ギヤアアア

!!!!???

悲鳴を聞きつけて夕姫が扉を開けたが、そこに誰もいなかった……。

「ひついいいい!!バレたらどうしてくだSARUの?!」

「あ、『赤澤 血冬』!!お前なにしてんだよ」

恐怖のクラスメート赤澤 千冬(コッチが正しい漢字)は悲しそうに泥雨にまみれた一通の手紙を取り出した。

「昨日の晩、わたくしこのお手紙を衛さんの机の上に置こうと思っていた学校に残っていたのですわ」

朝起きて学校行っていきなりあったら怖いと思うぞ。

っていつか、なにも夜に行かなくても……怖い。遠目からも近くから見ても怖い……。

「それでわたくし、きいてしまったのですわ」

雨がザアザア降り注ぐ中、ソレに負けなくらいの声と感情

『男が女を好きになったら、一生かけても守るものなんだよ!!』

衛……

『俺は、俺の名に恥じないように……好いた女を守る』

アレを見た後ならもはや心の隙間に入ることなどできないだろう。顔を下げて沈黙する千冬に泣くか？とときどきする。が、千冬は顔を上げた。

「ワタクシ感激いたしました。」

泣くどころか笑った。

「あのように自分が思ったことを貫けるなんて、素晴らしい素敵ですわ。」

嬉しそうに語る千冬はごくごく普通の少女だった。

(なんだ、怖くないじゃん)

「それでは、わたくし帰りますわ。お見舞いにきたのですが入る勇氣ございませんもの」

「あ」

行こうとする千冬の手を握る。冷たい、でも……心は温かい。俺はもうわかった。

「一緒に行かないか？」

見つけたかもしれない。俺も、守るべき女を……。きっと彼女もこたえてくれるはず……。彼女は優しく微笑んだ。

「いいえ、結構です。アルフォンを待たせていますから」

あっさりと手を離される。  
なんですかアルフォンって……。

「さようなら。」

今その挨拶が一番心に堪えるのですが……。後ろを振り向きもせず、しかも早歩きで去って行く彼女に悲しさを覚えられずにいられなかった。

ああ……俺って……かわいそすぎる。

がちや。

恵理瑠が出てきた。

こうして俺は後に女キラーと呼ばれるようになりましたとき。

## 第十六話（後書き）

次でオチがつけられたらなって思います。ぎりぎりまでお付き合いく  
ださい。

## 第十七話

びびびびび……

目覚まし時計が鳴り響く。

「むにゃ……」

ごろんと寝返りを打った。

………なんか気配を感じる。

そお、と目をうつすらと開けた。

………なんかいる。

「ギヤアアアア　　！！！！」

家の中が木霊する。

時計は朝の七時を指していた。

「な！な！なな」

わなわなと指を震わせながら夕姫ユキはソレを指した。

「なんでいんだああああああ　　！！！！」

人の部屋で勝手に同じベットに横たわっていたのは一週間前空港へ  
ノリ、外国へと旅立ったはずの男……颯太だった。

夕姫の叫びで目が覚めたらしく、唸りながら目を開けた。

「うん、ふあああ……おはよう赤川」

にっこりと爽やかに微笑む彼は置いていて、夕姫の驚きようと云ったらない。恥ずかしさと驚きと嬉しさが混じって何故か飛び跳ねてしまい、ベットから落ちてしまった。

「いいいいい、いつから？」

「うん？うんとね、昨日」

こんこん、というノックの音が聞こえ返事すると夜雨が入ってきた。手にはお茶が2つ

「おはよう夕姫、とアホ」

手渡されるコップには目もくれず夕姫は夜雨に飛びついた。

「なんでいるの!？」

「深夜零時に丁度ぐらいかな、あのアホ女がゴミを持ってくるような手つきで持ってきた」

アホ女 恵理瑠

「いやあ、向こうについたのはいいんだけどなんか俺親怒らせちゃったみたいでさあゝ帰って飛行機に無理やりのせられてリターン……したのはいんだけど家まで帰る金が無くてさゝ」

で、どこか分からないけど、とほとぼ歩いていたらリムジン乗った小学生の横に彼女を見つけて車に体当たり。非常に迷惑した彼女は家が分からないからとりあえずココに押し付けてしまえと押しかけたきたわけだ。

「なんでアタシの部屋なんだよ!!」

お子様じみたパジャマ着てたのにと涙目に訴えてくる。っていつてもねえ

「姉さんをボツクリさせようと思って」

「吃驚<sup>びっくり</sup>じゃなくてか!?ある意味ボツクリ逝きそうだったわ!!」

「逝くのはボツクリだよ姉さん」

「どうでもいいわああああああ!!」

微笑んでいた夜雨は何かを納得したように頷いた。

「私が良かった?姉さん」

好きネエ、と頬をワザとらしく赤らめると、勿論全力で即答された。

「違うわああああ!!そういう問題じゃないでしょ!男女が同じ部屋ってフツ……不純だよ!」

「まさかあ、夕姫相手にそんな」

紅く頬を染めて照れた姉に対して妹は鼻で「ふんっ」と一蹴した。本当に好きだったのかと疑わせるぐらい簡潔とした笑いだっ

「悪かったな色気無くて!!」

「俺腹減ったな」

「颯太君も落ち着くなああああああ!!」

そろそろ酸欠で落ちるかな、という時に丁度ピンポンと来訪者を告げるチャイムが鳴った。

下で玄関の開く音が聞こえた。

「夜雨」

「はい」

「衛君……の声じゃん」

良く見るとお洒落した夜雨がにこつと微笑んだ。

「夕姫」

ぼん、と手を肩に置かれ夕姫は嫌な予感を感じられずに入られなかった。

経験上、いつだって夜雨が人を落ち着かせるような素振りをしておきながら、人を落ち着かせたことなんて全く無かったからだ。

「お父さんとお母さん、一年は仕事で北海道にいるから帰ってこれられないんだって」

「いきなりか！うちの親そんなスケールのかい仕事してたっけか?!」

「それで私なんだけど」

左手に掴んでいたものを持ち上げた。旅行用の鞆

「……………まさか」

かなり嫌な予感。

にっこお

「私、衛の家のほうのお世話になるから」

「ちょー!」

「じゃーねー、ああそうそう。分かっているとは思っけど颯太君ココに居候するから」

「なんで?!」

「さあ?なんででしょ」

素早い行動で全く取り付く島もない、そんな彼女は鼻歌交じりに軽いステップで階段下まで降りると素早く靴を履いて外に出て行った。窓から叫ぶ夕姫に対していい笑顔で大きく手を振る。

「いいのか」

苦笑いしながら衛が聞くと彼女は姉にしか見せることのなかった慈愛に満ちた微笑を浮かべた。

「面白いからいいの」

鬼がいた。聖女の面をかぶった悪魔がいた。この性格は呪いとかじやなくて素のようだ。茶目っ気を一杯に出して幸せそうに笑った。

「これも、愛ゆえに〜だよ」

「そうか」

衛も微笑んで応えた。

「愛ゆえにか」

今日は清々しい曇りの一つもない晴天であった。若い二人は手を繋ぎながらいつまでもいつまでも歩いていったのでありました。これからも、ずっと……。

## 第十七話（後書き）

ご愛読ありがとうございました。全ては愛ゆえに、でした。  
またお会いしましょう（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0969h/>

---

愛ゆえに～

2010年10月11日21時29分発行